

林業生産技術体系化研究

——林地台帳による経営改善の事例的考察——

橋本武雄

はじめに

昭和39年度より林業生産技術体系化研究の一環として簿記調査を行つているが、一応1ヶ年間の集計を取りまとめたので、ここに報告する。調査の目的は林業の簿記様式として「林地台帳」を調査林家2戸に記帳してもらい、この様式の実際上の問題点を究明しようとするものである。

1 調査農家の概要

A K家の場合

(1) 経営規模

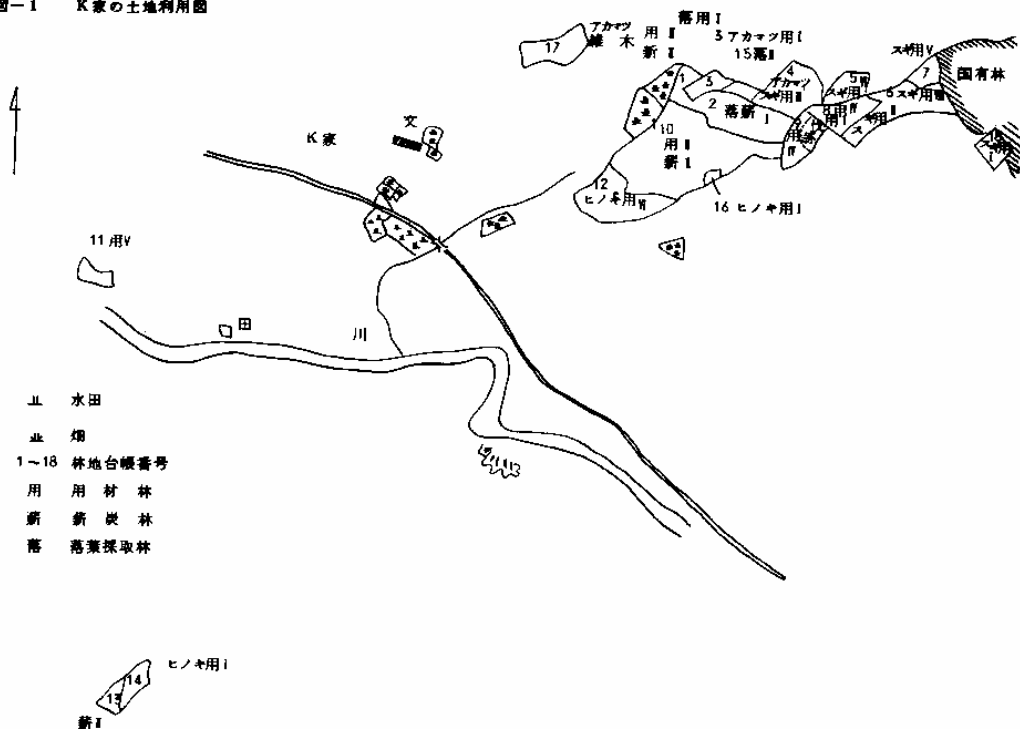
① 土地

K家の土地所有状況は表一1、図一1のとおりである。水田は9反歩近くあり、畑地は、1町3反を有している。そのほか、水田普通畑は1町歩ほど貸付けており、山林は1団地大きくまとまっているがスギ造林適地はあまり多くない。

表一1 土地所有状況

	所有地	借入地	貸付地	備考
田	8.8	-	4.7反	
畑	13.0	-	6.6	
林地	188.4	-	-	
原野	1.4	-	-	
共有地	43.2	-	-	共有林12町 3名共有
宅地	1.0	-	-	
計	255.8	-	11.3	

図一1 K家の土地利用図



② 労働

K氏は今年37才、昭和14年父親が亡くなつてから経営主として、K家伝来の山林を維持してきている。働き手は経営主の外に妻36才がおるのみで、母親は66才で孫の守などをして農林業経営の第一線から退いている。長男はまだ12

才なので当分の間はK氏と妻の二人だけの家族労働が主幹をなすこととなる。農林業総従事日数は調査期間の場合K氏344.6日、妻229.5日となる(能力換算、1日標準労働8時間)。これに対して雇用労働は19.9人と少なく、それも農繁期に限られ林業の雇用労働も割合少ない。しかし林業においては、下刈など多くの労働力を必

要とするものは、当地方の慣習として「渡し伐り」といって、下刈を請負せて行なうものが多いことが注目される。

③ 資 本 財

K家の固定資産の年度始と年度末との見積評価額を示すと表一2のとおりである。乳牛の子牛は40年5月1日分娩で現在育成中である。また、乗用車を35万円に40年12月1日に購入している。それに発動機は3人共有なので1/3で見積つた。立木の見積評価額は8,337,400円で、内訳は表3のとおりである。

表一2 固定資産評価額

種類	内訳	数量	年度始	年度末	種類	内訳	数量	年度始	年度末
土地	田	ha	円	円	大植物	林木	ha	円	円
		0.88	391,550	391,550			18.84	8,337,400	8,821,000
	畑	1.30	295,640	295,640		カキ8本 ウメ3本	50,000	42,000	
	林地	18.84	977,210	977,210		大動物	2	320,000	270,000
	原野	0.14	2,540	2,540		乳牛2頭	1	50,000	50,000
宅地	0.10	148,140	148,140	“子牛1頭	1	50,000	50,000		
小計		21.26	1,815,080	1,815,080	大機具	1/3	8,000	6,500	
建物(トタン屋根)	母屋	4.5	850,000	829,700	発動機	2	30,000	23,000	
	板蔵	3.5	50,000	47,300	動力	2	13,000	8,600	
	土蔵	10	120,000	115,500	脱穀機	1	9,000	6,500	
	作業場	6	50,000	47,300	精粉機	1	135,000	113,000	
	堆肥舎	4	35,000	33,200	耕耘機	1	28,000	21,700	
	納屋	4	28,000	26,900	自動	1	-	315,000	
	散噴機	1	30,000	18,500	乗用車 (トヨベツトコロナ)	1	30,000	18,500	
小計	72.5	1,133,000	1,099,900	バイク	1	9,010,400	9,695,800		
合計		2,948,080	2,914,980	計		11,958,480	12,610,780		

表一3 林木蓄積配分表

令級 樹種	伐跡	I		II		III		IV		V		VI		VII		VIII		X以上		計	
		ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石
スギ	ha	1.26	48			0.10	4	0.41	291	0.55	532	1.35	1642			0.50	840			4.17	3357
ヒノキ		0.99	10									1.10	647							2.09	657
アカマツ		0.25	5			0.80	222	0.34	170					0.06	65	0.33	404	0.10	148	1.88	1014
ザン	1.71	6.27	188	0.55	33	1.73	164	0.44	57											10.70	442
計	1.71	8.77	251	0.55	33	2.63	390	1.19	518	0.55	532	2.45	2289	0.06	65	0.83	1244	0.10	148	18.84	5470

(2) 土地 利用

次にK家の農業部門はどのように仕組まれているかみてみよう。まずはじめに土地利用をみると表一

4 のようになっていいる。作付面積でわかるように、K 家は稲作と林業の経営が主である。乳牛 2 頭を飼育しているので牧草畑も大きな割合を占めている。麦作は漸次減少しているがコンニャク畑の裏作として組み入れられている。林地をみると天然の薪炭林が多くを占め、今まで積極的な林業生産はなかつたことがうかがわれる。用材林率および人工林率ともに 43% である。

3 農業部門の性格と動向

K 家の農業部門を概観すると次のようなことがいえる。

- I) 稲作が主要部門をなしており、当地方の特産物であるコンニャク栽培および麦作は小規模である。
- II) コンニャク作りに代つて稲作につぐものは酪農で毎日搾乳し、出荷している。
- III) 蔬菜作は自給程度であり、耕種部門の収入は期待できない。
- IV) 家族労働が主幹をなし、労働不足を補うため、かなりの機械化を進めている。
- V) 落葉採取量も少なく、薪炭林および用材林に対する農業部門としての依存度は少く、林業部は独立した生産部門となつている。

4 家族構成

K 家の家族構成は表-5 にみられるように、6 人家族で男 3 人、女 3 人である。現在の構成では生産単位が少なく消費単位の多い時期であり、いわば、消費経済が優位にある消費経済的家族構成を示している。これは今後、長男、長女が独立するまで続き、林業部門への依存度はこれからより一層増すことが予想される。日本の農家経済は家計と生産経済とが未分離なことが著しい特徴としてあげられるといわれている。したがつて家計での消費単位数が大きいことは直接生産経済に影響し、中でも林業生産に著しい。しかし、現在の K 家の林木構成は高令級の林木は天然林のアカマツが大宗を占めているからそれほどの大きな期待はもてないのではなかろうか。もう一つ消費単位数と相まつて影響する因子としてあげられるのは消費水準である。K 家の場合 40 年に自家用車を購入し、農休日、農閑期は家族でドライブすることも多いといふかなり高い水準にある。これらのことは経営主体の好みとして現われることだが、林業生産におよぼす影響は見逃すことは出来ないだろう。

表-4 土地利用

部門	内訳	利用面積	収穫量
稲作	計	10.5反	85俵
	水稲	8.8	
	陸稲	1.7	
麦作	計	3.5	
	大麦	1.5	20俵
	小麦	2.0	30俵
コニャク		1.3	3年玉 1000貫
豆作		1.0	3俵 自給用
蔬菜作		1.0	自給用 また大根白菜など
畜産	牧草	2.0	
	デトマシ	2.0	
林業	計	148.9	
	苗畑	0.5	スギ苗 床替 2年養成中
	用材林	41.4	
	薪炭林	107.0	

表-5 家族構成

性別	続柄	年齢	生産単位	消費単位	備考
男	経営主	37	1.0	1.0	農主 林従
	長男	12	0.2	0.6	小学5年
	次男	2		0.4	
女	母	66	0.5	0.9	家事主 農従
	妻	35	0.9	1.0	農主、 家事、林従
	長女	9		0.8	小学2年

5 労働配分

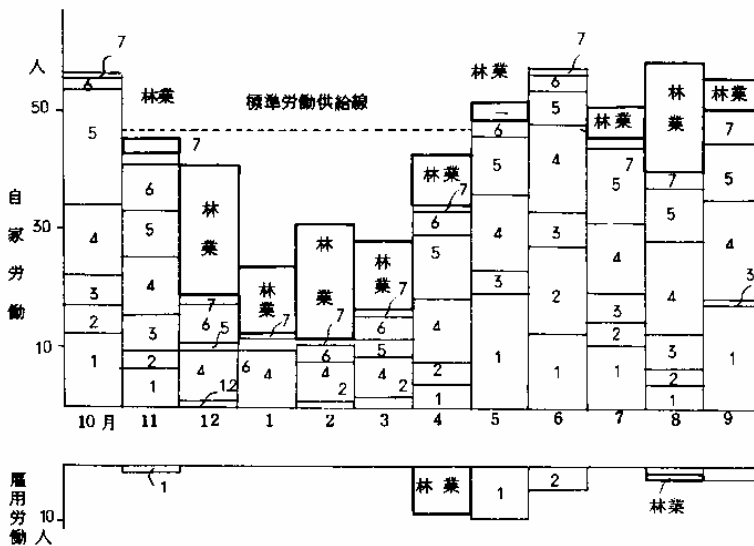
表一6はK家の労働配分を労働日記帳の集計によつて作成したものである。

表一6 K家月別作業別労働配分(能力換算)単位 人

月別	1.稲作	2.麦作	3.こんにやく	4.畜産	5.耕雑	6.農雑	7.農外	林業	計	比率
10	13.0	5.4	5.2	11.9	19.7	2.2	0.1		57.5	9
11	(10.8) 8.2	3.4	5.7	9.8	8.1	(0.1) 8.2	2.0	2.3	(0.9) 47.7	8
12	0.4	0.4		9.3	1.3	6.9	1.4	22.5	42.2	7
1				9.9		1.7	0.9	11.6	24.1	4
2		0.7		7.2	0.2	2.7	0.7	20.5	32.0	6
3		2.3		6.9	3.3	3.5	0.3	12.2	28.5	5
4	3.6	3.8		11.1	10.8	3.6	1.9	(8.3) 17.2	(8.3) 52.0	9
5	(8.8) 28.9		4.2	12.7	10.2	3.0		2.9	(8.8) 61.9	11
6	13.0	(3.7) 18.4	5.6	14.5	(0.2) 6.0	3.1	1.3		(3.9) 61.9	11
7	11.4	4.1	5.1	11.9	13.1		2.3	5.4	53.3	9
8	3.8	2.7	6.0	(1.4) 17.8	9.3	0.3	2.6	(1.0) 19.8	(2.4) 62.3	11
9	(1.8) 20.0		1.0	17.4	9.8		6.2	3.9	(1.8) 58.3	10
計	(11.4) 102.3	(3.7) 41.2	32.8	(1.4) 140.4	(0.2) 91.8	(0.1) 35.2	19.7	(9.3) 118.3	(26.1) 581.7	
比率	18	7	6	24	16	6	3	2.0		

註 1日標準労働時間を正味8時間として換算

図一2



これによると畜産部門への投入が最も多く
ついで林業部門、稲作部門の順となる。
畜産部門が多くなっているのは飼料投与、
手入れ、搾乳、牛乳の出荷という作業が
毎日2~3時間かかっているためである。
労働投入の面よりみれば、K家の農家経
済はこの3つの生産部門が柱となってい
ることがうかがわれる。また、農繁期労
働のピークは、5月より、秋期10月頃ま
で続いている。(図一2)

表一七はその月の総労働日数が標準労働日数を超過する月における林業労働日数を競合とし、不足する月のそれを補合として算出したものである。K家での標準労働日数は月25日×1.9人＝47.5日(能力合計)となる。

表一七 月別労働配分の競合と補合

月別	競合日数	補合日数	差 引	月別	競合日数	補合日数	差 引
10				4		8.9	+ 8.9
11		2.3	+ 2.3	5	2.9		- 2.9
12		22.5	+ 22.5	6			
1		11.6	+ 11.6	7	5.4		- 5.4
2		20.5	+ 20.5	8	18.8		- 18.8
3		12.2	+ 12.2	9	3.9		- 3.9
				合計	31.0	78.0	+ 47.0

これから判断すると林業労働は総体的に補合的に働いている。4月までは補合し、5月から9月までは競合し、その大部分が下刈作業であることが問題となる。この不安定な下刈作業への労働投入を少しでも節約するための工夫から林業技術がいかに関与されているかを次の林業部門で述べることにする。

6 林業部門

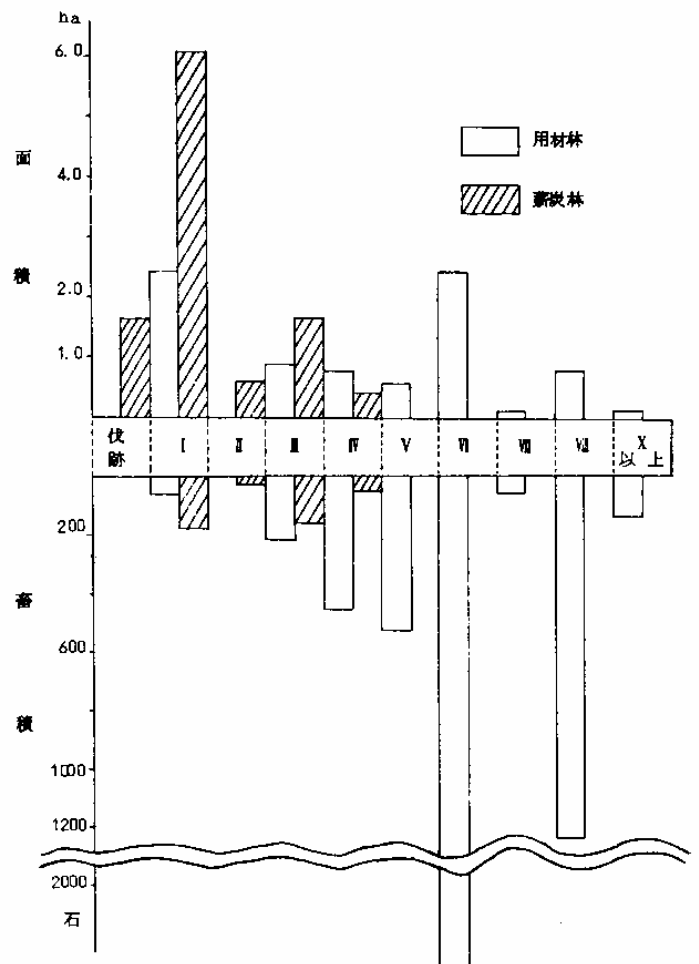
① K家の森林構造

まずはじめに、K家の森林構造がどのようになっているかをもつとくわしくみると図一三のようになる。先代の植林したⅣ令級の用材林2.45ha、蓄積2289石があつて、これが中核をなすものと見られるが、他の高令級のもの、アカマツ天然林に限られている。Ⅰ令級が多いのは今の経営者となつてから植林が急テンポで進められている証拠であろう。雑木林が10町歩ほどあり、今後の拡大造林の余地もかなりある。とくにK家の場合、雑木林への依存度の高い作目は少ないので造林適地は人工林化されていくであろう。

② 林業部門の位置と機能

つづいてK家では林業部門が全体の生産経済の中でどのような位置にあり、どれだけの必要性をもっているかを明らかにする必要がある。そこで農林業別の粗収益、経営費、純収益と労働投入量の資料を示そう。(表一八)

図三



表一八 農林業別収益と労働投入量

部門別	粗 収 入		経 営 費		純 収 入		労働投入量	
農 業	178,486円	60%	31,038円	55%	147,448円	60%	463.4人	80%
林 業	120,000	40	24,866	45	95,134	40	118.3	20
計	298,486	100	55,904	100	242,582	100	581.7	100

これによると農業の純収益は全体の60%、林業は40%とほぼ半分を占めているが、労働投入量は林業部門が20%にすぎなく、先代の残した蓄積に浴している面がみられると同時に天然林の存在もかなり大きく作用している。林業収入の内訳をみると天然用材林の収入が46,000円 で最も多く38%を占めアカマツ天然林の間伐収入が主である。これに次いで人工林用材Ⅳ令級(スギ間伐)が、39,000円(33%)である。K家の連年成長量は約80石で見積20万円位と考えられるから産出は節約的であるが、投入量からみると、この程度しか期待できないだろう。

農業部門と比較すると林業部門はかなりの収益をあげ、K家は水稻作を中心として農業部門と林業部門と二つの主要部門から形成される農林複合型生産経済になつているといふことができる。労働配分からみると12月～3月までは林業部門を中心とした作業が続き、4月～1月までは農業を中心として作業が続く。ここで競合するのは下刈作業だけである。複合型における林業部門は経済的位置および機能が重要なため安定性の高い生産部門となりうる。しかしK家の場合、畜産部門の労働量がかなり大きく、これが林業部門へ影響していることは否めない。K家の稲作、畜産部門を中心とした農業部門と林業部門の関係は互いに独立的であり、林業部門への依存度は非常に少ないとみてよい。

③ 慣行技術「渡し伐り」について。

前でもみたごとく林業への労働投入は産出に比べかなり少なく、労働節約的林業経営ともみなされるがもう一つここで検討したいことに当地の慣行技術「渡し伐り」がある。これは下刈を要する林地より約何人役かを見積つて請負わせるものである。請負者側からすると早く終わればそれだけもうかるといつた面があり、雑な作業となるきらいがある。これは当地方だけではなく、かなり多く行なわれているようで請負者と所有者の社会的関係ないし、契約上不合理性非近代性が多分に内蔵しているものと推察される。

④ K家の林業生産の動向

今までみてきたようにK家の林業生産は、現在のところ収入の面で消極的であり、これからのK家の消費経済の増大にともない、これに対応する蓄積は不十分であり、10町歩におよぶ雑木林の転換をはかり人工林化していく必要があるだろう。現状の複合型経営を合理的にもつていくには農業部門へ目を向け、改善することが肝要である。

K家の林業生産の動向を要約すると次のようなことが言える。

- I) 農林複合型経営で農林業間の結合関係が少なく、林業は独立的生産部門の位置にある。
- II) 投入、産出の関係をみると新植面積は拡大されていなく、産出でも消費経済にはあまり寄与していない。
- III) 労働配分においてはほぼ林業生産は補合関係にあるが下刈が競合すること。
- IV) 森林構造を見ると高令級のは天然アカマツ林が大きなウエイトを占めている。
- V) K家の林地はスギ造林適地は少なく、アカマツ、ヒノキなどに限られる林地が多い。
- VI) シイタケ栽培を少しづつ行なつているが毎日一定量の労働が必要な畜産部門を継続していく限り自家労働でのシイタケ栽培には限度がある。
- VII) 下刈労働の節約、補充のため渡し伐りを採用して、下刈を早くあげるため密植を行なつている。その他間伐枝打などの技術は導入されていず、労働節約的、粗放的林業経営である。
- VIII) 自家労働を中心とした経営で、労働不足の問題が今後大きくなるだろうが、林業部門への省力化、機械化の改善はなされていない。農業面における機械化に対して林業面は皆無である。

B M家の場合

1 経営規模

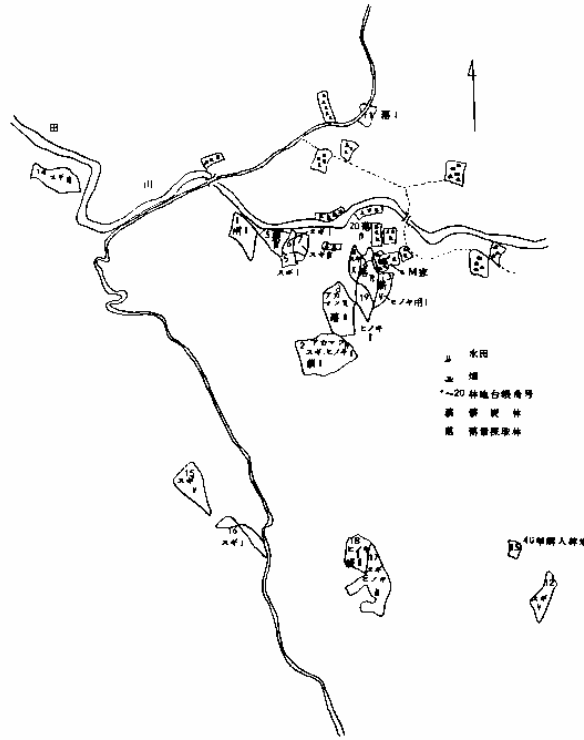
① 土地

表-9 図-4 で見られるようにM家の土地所有状況の特徴として、まず分散性があげられる。まとまりがなく、かなり遠距離に分散しているものが多くとくに林地についてはこれが言える。土地所有規模は水田1町歩余り、畑地7反6畝林地11町歩あり、中規模の農家である。

表-9 M家の土地所有状況

	所有地	借入地	貸付地	備 考
田	10.9	-	0.7	
畑	7.6	-	1.3	
林地	110.0	-	-	
宅地	1.0	-	-	
共有地	1.0	-	-	カヤ場 45反9人共有 雑木山 5.0反10人共有
計	130.5	-	-	

図一〇 M家の上地利用図



② 労働

M家の労働力は、経営主(38才)妻(32才)と母(61才)が生産にタッチするのみでK家と同じく、家族労働を中心とした農家である。経営主の妹弟は皆他出し、独立している。長女は12才長男はまだ若干7才という家族構成から今後とも主人と妻との自家労働の農林業の経営が続くだろう。経営主の年間総従事日数は357.7日、妻295.2日(能力不換算)となり雇用労働は男35.2人、女21.2人、計56.4人で全体のわずか8%にすぎない。

③ 資本財

次に生産要素として固定資本財をみると表一〇のとおりである。M家は和牛2頭を飼育し、その他冬期コンニャク種玉の貯蔵用として火室がある。コンニャク種玉は400貫前後あり、見積価格250,000円程度である。立木の見積評価額は5,822,500円で、今年の増殖額は340,400円で表一〇のとおりである。

表一〇 固定資産評価額

種類	内訳	数量	年度始	年度末	種類	内訳	数量	年度始	年度末
土地	田	1.09ha	378,460円	378,460円	大植物	山林	11.0ha	5,822,500円	6,162,900円
	畑	0.76	148,120	148,120		カキメ	8本 5本	50,000	42,000
	林地	11.00	573,140	573,140	大動物	和牛5才	1頭	150,000	148,000
	原野	0.10	3,840	3,840		和牛2才	1頭	90,000	95,000
	宅地	0.10	79,920	79,920		山羊	1匹	2,000	1,100
建物(カヤ屋根)	母屋	45坪	500,000	481,100	大機具	耕耘機	1台	110,000	90,000
	作業場	18.5坪	125,000	116,000		発動機	1	20,000	14,800
	板蔵	6坪	50,000	47,700		もみすり機	1/3	10,000	9,300

種類	内訳	数量	年度始	年度末	種類	内訳	数量	年度始	年度末
納屋		2坪	30,000円	18,900円	カッター		1/3	10,000円	8,700円
堆肥屋		6坪	50,000	46,600	縄ない機		1	5,000	2,500
コンニャク用火室		3坪	15,000	14,100	動力噴霧機		1	30,000	25,000
					バイク		1	25,000	21,000
小計			1,943,480	1,907,880	脱穀機		1	50,000	42,500
					合計			6,374,500	6,662,800

表-11 M家の林木蓄積

樹種	令級		I		II		III		IV		V		VI		X以上		計	
	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石	ha	石
スギ	1.45	55			0.86	380	0.05	36	1.89	1828			0.25	522	4.50	2821		
ヒノキ	0.70	8	0.60	18	0.45	58	0.25	69							1.98	153		
アカマツ			0.10	8					0.20	143	1.59	1442	0.10	148	1.99	1741		
ザツ	0.36	11			0.44	42	1.50	195	0.36	59	0.50	100			3.16	407		
計	2.51	74	0.70	26	1.73	480	1.80	300	2.45	2030	2.09	1542	0.35	670	11.63	5122		

2 土地利用

M家の農業部門は表-12にみるごとく稲作を中心とし、畑作ではコンニャク栽培が大きなウェイトを占めていることがわかる。豆類、野菜は自給用としての域を出ず、麦作はコンニャクの裏作として、若干作付けているにすぎない。林地をみると用材林面積が8.47haと多く、全体の7割を占めて、人工林率も56%と高い。薪炭林3.16haは自給用薪炭材の供給源であり、またコンニャク畑への敷料として落葉採取林の機能をはたしている。コンニャク畑1反歩につき、落葉採取林がほぼ1反歩必要といわれているからM家の場合これ以上の拡大造林は現状のところ望めないだろう。

表-12 M家の土地利用

部門	内訳	利用面積	収穫量
水稲作		10.9反	70俵
麦作		1.0	30俵その他こんにゃくにやく畑裏作
こんにゃく		6.0	生玉 3,000貫 } 自給用
	豆類	0.3	
	野菜	0.3	
林業	用材林	84.7	
	薪炭林	31.6	

3 農業部門の性格と同向

今までみてきた資料よりM家における農業部門は次のように要約することができよう。

- I) 自家労働を中心とした農業経営で、雇用労働は少ない。
- II) 水稲作も当地の平均以上の作付面積を有し畑作ではコンニャクをかなり大規模に組み入れている。
- III) 和牛2頭を飼っており自家労働の完全燃焼をはかっていると同時に大きな現金収入源で消費経済に寄与し、生産経済には堆肥としての機能をはたしている。
- IV) コンニャク作は山林への依存度が高く雑木林の確保が必要である。しかし、すでに、かなり高度な人工林化を進めている。
- V) 労働不足を補うため、機械の導入がなされており、シイタケ栽培にみるように協業化を進めて行く姿勢がある。

4 家族構成

M家の家族構成は男2人、女5人の7人から成っている。

(表-13) M家の林木構成は先代の造林実績により、かなり高令級の用材林があるので、林業部門へ依存することができ、家族構成の変換期をスムーズに通ることができるだろう。しかし次代の長男長女は、まだ若年であり当分の間、主人と妻の2だけの自家労働を中心としたものにならざるを得なく、長女、長男が独立するまで、林業への依存が続くものと考えられるから産出に見あつた投入を続けねばならないだろう。現在M家はK家と同じく消費経済が優勢である。

表-13 M家の家族構成

性別	続柄	年令	生産単位	消費単位	備考
男	経営主	38才	1.0	1.0	農主、林従
	長男	7		0.5	小学1年
女	母	61	0.5	0.9	家事主、農従
	妻	32	0.9	1.0	農主、家事、林従
	長女	12	0.3	0.8	小学6年
	次女	9		0.8	" 2年
	三女	5		0.5	

消費水準は当地にては、平均並よりやや高いといつた程度である。

5 労働配分

次にM家の労働配分をみてみよう。(表-14)

表-14 M家月別、作業別労働配分(能力換算)

月別	1.稲作	2.麦作	3.こんこく や	4.養畜	5.耕雑	6.農雑	7.農外	林業	計	比率
10	21.8	2.2	11.5	0.5	3.4	2.3			41.7	6
11	(1.4) 13.2	1.0	(4.4) 38.2	0.4	(0.8) 5.7	1.5	(0.8) 2.6		(7.4) 62.6	9
12	2.8	1.3	(10.0) 25.2	1.0	0.8	2.8	3.2	15.7	(10.0) 52.8	8
1				(1.0) 13.4	0.5	1.7	1.1	15.9	(1.0) 32.6	5
2	1.0			3.8		6.3	23.8	14.4	49.3	7
3	15.7	1.6		4.2	2.3		3.9	24.1	51.3	8
4	11.5	2.9	0.5	7.6	6.6	6.1	0.9	14.8	50.9	8
5	(4.5) 37.4		18.8	3.7	2.4	0.6	3.5	1.5	(4.5) 67.9	10
6	(8.2) 29.9	(4.0) 26.6	12.5	3.2	10.2		0.4	0.4	(12.2) 83.2	13
7	15.0	4.4	5.5	4.7	11.1	1.4	5.5	8.3	55.9	8
8	3.9	1.9	8.5	9.9	7.4		6.9	14.5	53.0	8
9	(12.2) 30.3		3.7	5.6	3.5	1.1	3.8	14.8	(12.2) 62.8	10
計	(26.3) 182.5	(4.0) 41.9	(14.4) 124.4	(1.0) 58.8	(0.8) 53.9	23.8	(0.8) 55.6	124.4	664.5	
比率	27	6	19	9	8	4	8	19		

稲作部門へもつとも多く労働を投入し(27%)これについて、コンニャク19%、林業19%で同じである。労働投入量の面より見ると、M家では稲作を主要部門とし、こんにゃく、林業は副次部門の位置にある他の部門はほぼ同じであり労力のピークは5~6月と9~12月となつている。

5~6月は主として田植が主要をなし、9月~12月はコンニャクの収穫乾燥荒粉作りが主なる作業である。M家もK家と同様、能力換算の労働量は19人なので、標準労働日数は47.5日である。これにより林業部門と農業部門の労働配分関係を見ると12月、1月の2ヶ月間だけ、補合関係にあるが、その他の月はすべて競合しているととに着目される。(図-5)林業生産がこのような不安定的な位置にありながら、林業への労働投入量もK家に比べて多く、林業生産部門の機能が大いに活用されているようである。

6 林業部門

① M家の森林構造

前の経営規模で見たM家の林木構成を図で示すと、図-6のようになる。中核をなすものがV令級の用材林2.09haで主体はスギ林であり、さらに屋敷の近くに50年以上の備蓄林(見積522石)を有していることは先代の努力の賜であり心強い。ただⅦ、Ⅷ令級の用材林が欠けていることが少々目立つ。今後、拡大造林する余地はないが、M家の薪炭林に見られるような雑木と天然アカマツ混交林の方向も有望であろう。コンニャク作りに用いる落葉はアカマツの落葉も混つていた方がむしろ有利な面もあるといわれるし、当地はアカマツ天然林の成長はすばらしいものがあり、今後アカマツの施業問題について研究したいと経営者は語っているからである。

図-5 M家の部門別年間労働配分

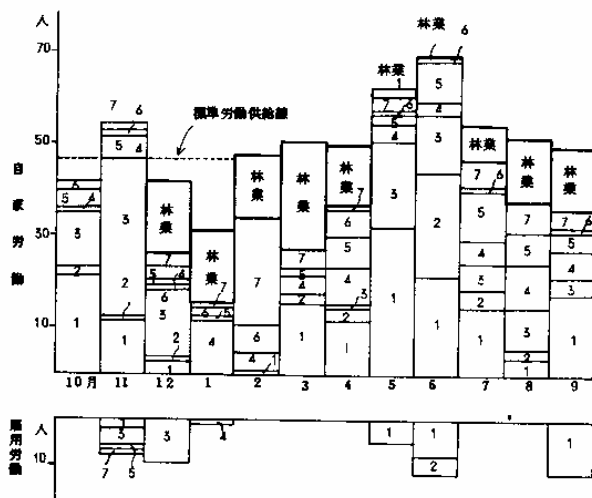
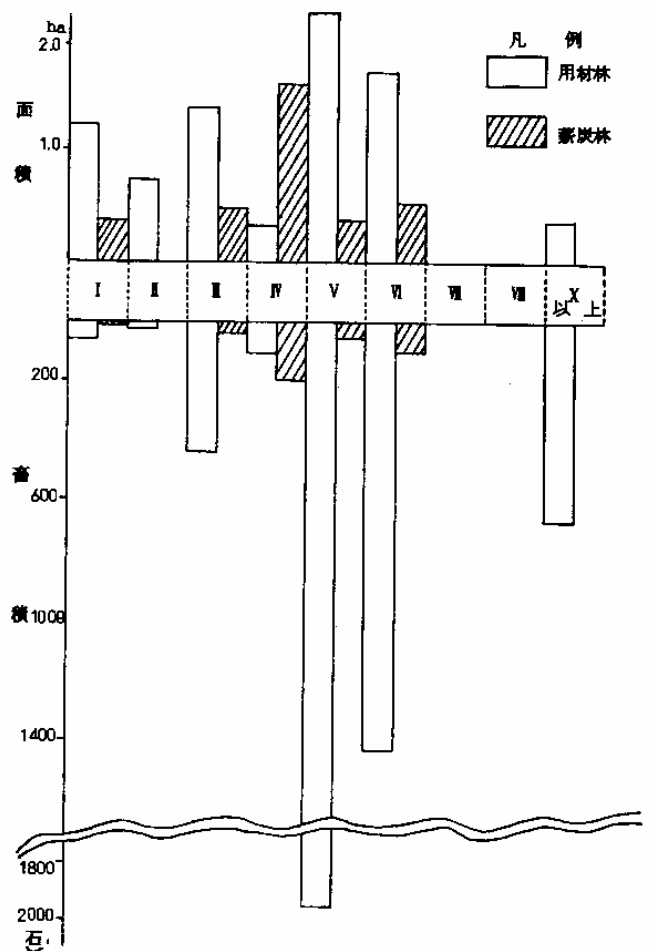


図-6 M家の森林構造



② 林業部門の位置と機能

つづいて、林業部門がM家の農家経済にどのように作用しているかをみることにする。表-15はM家の農林業の収益と労働投入量を比較したものである。これによると林業部門の純収入は37%を占めているが、当年の林業支出は極端に少なく、粗収益で比較したほうが妥当であろう。産出量はかなり多いが、労働投入量は19%と低く、やはり労働節約的経営となつている。産出面の内訳は、天然アカマツの間伐収入が大部分で246,200円(93%)となつている。シイタケ栽培はまだ開始したばかりで、収益は出ていなく、自給程度にとどまつている。その他に薪などの家計仕向けが見積17,000円ほどとなつている。また、当年M家では林地0.3haを10万円で購入して、林業生産の規模拡大をねらつていることがかわれる。M家においては、稲作とコンニャク作を主要部門とし、林業は副次的生産部門にある。

表-15 農林別収量と労働投入量

部門別	粗収益	経営費	純収入	労働投入量
農業	554,025円 68%	117,231円 98%	436,794円 63%	540.1人 81%
林業	264,220 32	2,145 2	262,075 37	124.4 19
計	818,245 100	119,376 100	698,869 100	664.5 100

労働配分から見ると林業部門は12月～4月と7月～9月の2つのピークがあらわれている。前者は撫育管理、地拵え、間伐、薪炭林の萌芽整理などであり、後者は下刈である。後者の期間に競合するのは、主として稲作部門であつて、コンニャク作とは競合していない。林業への労働投入は、すべて自家労働であることも特色である。以上M家における林業部門を要約すると次のようになる。

労働配分から見ると林業部門は12月～4月と7月～9月の2つのピークがあらわれている。前者は撫育管理、地拵え、間伐、薪炭林の萌芽整理などであり、後者は下刈である。後者の期間に競合するのは、主として稲作部門であつて、コンニャク作とは競合していない。林業への労働投入は、すべて自家労働であることも特色である。以上M家における林業部門を要約すると次のようになる。

1. 林業は副次的な生産部門にとどまるが産出額はかなり多く、取引的生産部門に近づきつつある。
2. 労働配分上、主要部門である稲作と競合するが、自家労働でまかなつている。
3. 林分構成は、産出において満足すべきタイプに入り、これの維持増大をはかつていること。
4. 薪炭林および落葉採取林として、これ以上拡大造林することは出来ず、農用林を確保しておかなければならない。
5. 用材林を中心とした経営ばかりでなく、シイタケ共同経営をはじめている。
6. 限られた自家労働にありながら、林業面への機械化はまだなされていない。
7. 規模拡大をはかりながらも、林地の分散性が経営上マイナスにしている。
8. 林地はアカマツ林適地、スギ林適地と多様に富みヒノキも最近造林しているので、木材価格変動に対して弾力性をもつた森林構成といふことができる。

2 記録様式の説明

(1) 調査の経過

昭和39年度7月より連絡試験である林業生産技術体系化研究の一環として、簿記調査を行なつている。福島県は林地台帳を中心とした林業経営上の簿記様式の検討を担当したが、その土台は大槻式農業簿記であり、現金、現物日記帳、労働日記帳の2種を調査農家2戸に記帳をしてもらつた。調査の目的は実際に林家に記帳してもらつた場合どのような点に問題点および不備があるか。農家自身で決算集計したい場合どのような方法が考えられるか、または今後改良工夫する点があるかどうかを検討することにある。毎日簿記帳は苦しいものだが、年間または何年かに1度集計することによつて、経営改善の方向が芽ばえるし、毎日の記帳の苦勞がむくわれることになる。集計決算をぬいて、農家への簿記指導は無意味であろうからである。

(2) 林地台帳について

① 林地台帳の様式について

林地台帳とはどんなものだろうか。まず、その様式を紹介しなければならない。

表 - 16

名称		生産目的				面積				林地台帳			
地番	地籍	海拔高	方位斜	基岩	土壌型	深さ	A層全層	厚さ	上層下層	構造	下層植生		
地価 変遷	購入見積	年	円	年	円	年	円	年	円				
運搬方法													
自由記事欄													

事業沿革と現況

年	月日	摘要	収入	支出	記事	年度	摘要	樹種 本数	蓄積	労働量	伐採 また 収穫	採 は 量	林木 時価	費用価	再調達 時価

これは、昭和33年に林業試験場経営部の紙野技官が発表されたものであり、その紹介および簿記上の位置づけがなされている。林地台帳(ないし林地原簿)の様式は表-16のとおりである。

② 林地台帳の記帳の仕方

この台帳は山林の取扱方法が異なるごとに作るわけで1筆ごとに考える必要はない。また、2～3年の林令差は無視してもよく、樹種別、施業別に記帳するが、林地が分散していなくまとまっていれば一括して同等に取扱つて作成する。名称は村家が普通よんでいる俗称程度でよい。地番、地籍、海拔高、方位、傾斜、基岩、土壌型、土壌の強さ、構造、下層植生は林地の自然的条件を明らかにしておくため記帳するものである。地価の変遷は林地の売買があつたとき、運搬方法の推移は林道の新設や改修があつて運搬技術の変化が認められたようなときに記入しておく。その他権利関係、境界の目安、被害その他メモしておきたいことがあれば記入する。下欄の事業沿革と現況は年に1～2回記載すればよく、過去のことも記憶にある範囲で記入しておけば大いに参考となる。その後は年代順に追つて記入し、作業内容、資財、労働投入量など記入すればよく、記事欄はこれに対する参考事項をなるべくくわしく記載しておくようにする。

右の欄の林木時価、費用価、再調達時価などは価値関係を示す事項である。林木時価には現在の見積評価額をあげ、林木費用価には現在の見積評価額をあげ、林木費用価には今までどのくらいの費用がかかっているかを書く欄である。再調達時価とは、いまこの林分を仕立てるのに、どれだけの費用がかかるかを見積つて記入する項目である。この調達時価と見積評価額とを対比すれば、この林分の収益がわかることとなる。1口に言えば林地台帳は、山林の履歴書といふことができ、なるべくくわしく記載しておけば、経営者が代つても大いに参考になるだろう。

以上のことから林地台帳は、次のような特色があるといえる。

- i) 山林の施業方法別に記載することができるので、林業生産のごとく、地位、地利など場所によつて異なるのをひとまとめにせず、現実に見合つた資料が得られる。
 - ii) 林業生産は長期性であることが経営上最大のネックであるが、これにはメモを残していつて克服することが肝要であり、この様式はこれを最大のねらいとしている。
 - iii) 簿記記帳のごとく毎日かかさず記帳することなく、1年に1回か2回位で充分間に合い、しかも林業生産における年間の集計をも兼ねていることを、これは林家にとつて大きな魅力である。
 - iv) 農業簿記のように表現するものが金額、時間数などといった数字だけになりがちであるが、この様式になるとかなり実情に近いことがくわしく文章で表現することができるし、経営改善の資料となる。様式にあまり制約がなく弾力性があること。
 - v) 金額の面ばかりでなく、労働投入量、資材量もそのまま出てくるので補助簿として労働日記帳をつける必要もない。
 - vi) 林地の場所別に原簿が作られるため、労働資材投入量および産出量など施業別、林地別に明らかにされる。農業簿記であると年末の決算時に作目別、ほ場別に再集計する必要がある。
 - vii) 簿記記帳は経営改善に目的があるのだから金、物、人の3面にわたつて詳細に記帳していく必要があるわけだが、これでは煩雑になり、決算集計に混乱をきたすのみであり、余分なものは省略することが肝心であるが、この林地原簿の様式はこの点も工夫されている。
 - viii) 農業簿記であると期間計算の枠にはめられ、長期性を有する林業生産での1ヶ年間の損益計算は意味がなく、林地台帳はこれの枠を無限に広めたものである。
 - ix) その積み重ねにより、そのまま林地別の施業沿革ができあがる。農業簿記の自由記事欄は集計上、完全な形で現われてこなく、行動様式などのとりまとめ行なわれ得ない。
- 以上のことがらをあげることができるが、これと逆に欠点もあろうかと思ひが、後で検討することとする。

③ 林地台帳の簿記上の意義について

簿記の一般的目的と機能を考えると、まず歴史的記述と成果計算の機能の2つがあげられる。発展過程を見ると歴史的記述の必要性から始まり、報告的任務が重要性をおびてくる。今までの農業簿記においては、農家の経営改善を直接目的としたものが少ないきらいがあり、これらの機能をも果たさせようと

するならば、もつと生産の技術的過程を通じて達成させなければならない。また、個別的貨幣資本の循環としてとらえる従来の簿記には生産主体の行動様式まで現われてこなく、簿記的成果分析が経営決定の素材となつていたかは疑問である。農家にとって数量的概念は切実な必要性がなく、それ以上に質的な情勢を現わすことの方が必要である。農業簿記で林業部門を取扱う方法は財産的収入、支出となり、動態的記録に記入され、その期間のもうけにならない取引となり、落葉などを農業部門に使つたとしても出て来ない。つまり農家簿記にては所得経済より消費経済に出てきてはじめて記帳される。さらに、小規模農家林業では日々記録計算するほどの取引もないので一般的農業部門と異なつて、特殊な記録様式の考察が必要となつてくる。林業生産の基本的経済循環を考へて簿記様式を把握しようとするれば、原価計算と商業簿記を組み合わせた工業簿記にもう一つの金融簿記＝銀行簿記の様式を組み合わせる必要がある。さらにまた森林所有者の行動様式ないし行動基準をも表現する必要があり、副次部門として林業生産ならば林地への投入、産出の關係が林業所得の安定や上昇を期待しうるものであるのかどうかなどをチェックする記録様式が望ましい。

主要部門をなしている林家ならば投資額と森林の売買価とを比較対象できることが望ましく、投資の利廻り計算を簡単に行なわれるような様式が望まれる。

さらに立ち入つて考察すると損益計算および原価計算の問題がある。林業のように長期間にわたり、かつ、多面的な目的に即応する損益計算を可能ならしめる基礎手段として個々の林地に生立している林木の原価あるいは当該林地に固定せられている資本額などを明らかにしておく記録方法が必要とならう。これには製造工業の原価計算の方法を参考にしなければならないが、そのまま使用するわけにはいかない。なぜならば、そこに林業生産特有の生産期間の長期性の問題があるからである。農家林業においてはとくに個々の林地の取扱方は技術的にまた経済的に問題になるのだから個々の林地を対象とした「個別原価計算」の方がより有用であらうし、個別に原価を計算していつて、その後全林地の総合化、組織化が計られる必要があるだろう。林業は土建業のごとく現場がたくさんあることが特徴で、これら全体を包括する経営組織体を考える必要がある。5～10年位の林木ならそこに投下された労働や資本の消耗額は造林地上の立木の原価を構成しているし、30～40年の林分は金融業的な意味での利益をもとめる段階にいたつた林木であり、もちろんその間には技術水準も経済構造も変つてはいるはずであるから、農家林業の原価計算において把握されるべき数値は単に歴史的な原価のみにとどまらず、それぞれの評価時点において経営主体が経営決定をなすに必要な諸数値——例えば一定の技術の下における生産費前価後価あるいは再調達時価等々——も算定しておく必要があるだろう。

以上のように基礎的な事項を考察して取扱単位林地ごとに記入されるべき原簿を試作したという経過となる。

3 記帳指導過程での問題点

1) 林地台帳の様式について

それでは実際にこのような様式を農家に記帳された場合、どのように受けとめられ、利用されているのかをここ1ケ年間(短い調査期間ではあるが)記帳指導した立場から検討してみたい。

はじめに個々の林地の自然的条件を把握するための調査項目「海拔高」から「下層植生」までは形式的に欄を設けたというきらいがあり、簿記様式につきまとう官庁の調査、統計の色彩がこく、農家にとっては客観的に、科学的に調査する必要はないように思われる。これははぶいてむしろ自己の山林の实情に見合つたイメージを生かして自由記事欄に詳細に記録させたほうがよいだろう。これらの事項の必要性は認めるとしても前提条件としてでなく、年々積み重ねて新しく発見するごとに自由に記録する様式の方がより望ましく、とつきやすいものとならう。あくまで自計主義を重視するならばこれらの事項は農民にとつて空々しく白紙になつて残ることが多いように推測される。これにとりなつて自由記事欄をもつと大きくとり、各林地の実測図ないし略図を書いておく程度であつた方が好ましい。

下段の事業沿革と現況欄はとくに問題点はないが、二重線の右側に記載される林分の推移と現況の各欄を

農家に徹底させるのが困難であることを指摘しておこう。

またこの事項はどちらかという大規模林家には大いに参考になるかも知れないが、中小規模のいわゆる農家林業を営む経営農家にとってはさほど必要性はないのではなからうか。その他事業沿革などは年々記入していくのに便利であり問題はない。

(2) 決算、集計上の問題点

簿記を記帳しても農家自身が集計決算を行わなければ無意味で、これを行なうことによつてはじめて自分の家の経済の実態を把握することができる。林地台帳によつて記録し、1ケ年間の決算集計をしようとするときのどのような方法があるのであろうか。この点について、この項でくわしく考察してみたい。

林地台帳は林業生産部門のみが記帳されるので、農業の片手間に林業を営んでいる農家では記帳すべき事項が少ないだろうから年間の集計は必要ないかもしれない。また林業のみを別個に決算しても農家経済の改善目標となりうるか疑問である。ただ農用林的機能をもつ林地においてはこのかぎりでない。林地台帳は個々の林地におけるものであるから全体を包括した集計が必要となる。

まず年間の集計を考えてみると1ケ年間にどれだけのよう林業生産にタッチしたかをひと目でわかるような様式が望ましい。いわば林地台帳と並行して毎年積み重ねていき、これを経営主体の林業における履歴書となるようなものでありたい。林業部門全体の収入、支出を順を追つて記載し、そのよつてきたる林地を明確に記入しておく。林地名は林地台帳の№を記すだけでよい。また主なる物資の数量、労働量、中間副生産物の農業部門への使用用途なども記載し、1ケ年の集計とする。そして林地台帳より推定される連年成長量と比べて収入および支出のバランスがどうなつているかを比較検討することができ、その年の主なる作業名、被害などを書く記事欄もあればよいだろう。これらの様式は次のように試作できよう(表-17)

これらの実際利用の問題点については次項で検討したい。

表-17 林地台帳年間集計簿

月日	摘 要	林地名	収 入	支 出	物 財 投入量	労 働 投入量	家計仕向 け 数 量	農業部門 仕向け数量	記 事
			円	円					
	年 計								

4 決算、集計の結果と主要内容の説明

(1) K家の場合

K家の39年～40年の1ケ年における林業生産はどのようであつたか。表18をもとにみていくことにする。

表-18 K家、39年林地台帳集計表

月日	摘 要	林地台帳番号	収 入	支 出	物 財 投入量	労 働 投入量	家計仕向 け数量	農業部門 仕向け数量	記 事
7月	スギ間伐 13石 石3,000円	6	39,000		本	入			
8月	スギ林下刈 賃金700円	6		7,000		雇用 10			
11月	薪材5棚 売却	1	25,000			2			薪材家に分譲
11月	アカマツ除伐 11石、パルプ材として売る マツ薪分譲 石1,000円	4	3,500 11,000				マツ薪 50束		
12月	薪炭5棚 2棚売る	3	10,000			22	薪 3棚		
1月	アカマツ間伐 パルプ材1石 売る 運搬費500円	10	1,500	500					
1月	薪材として6棚売る	10	30,000			11			
2月	落葉採取					6		落葉 60貫	落葉コンニャク 畑用
3月	アカマツ植付 苗木単価420円			12,300	2,000	雇用 6			本年はヒノキ苗購入
4月	ヒノキ植付0.4 ha 苗木8円			21,200	2,000	” 8			
			120,000	41,000	アカマツ 2,000 ヒノキ 2,000	雇用 24 自家 41	見積 16,500円		

林業収入は120,000円で、内訳はスギの間伐材が39,000円、他はアカマツ天然林の除伐材および間伐材か薪炭林である。アカマツ林が16,000円、雑木林が65,000円となつている。これよりK家では雑木を伐つて拡大造林を進めている過程にあることがわかる。労働力は雇用労働が38%を占めている。K家では林業部門が独立した主要部門にあつて、農用林の機能をはたす林分は少なく、落葉採取量などの採取量は少なくなつている。K家としては今後、いかに林業労働力を確保し、拡大造林を進めつつ維持増大させるかが大きな問題といえよう。林業部門をさらに積極的に活用するには、まず自家労働を林業に向けるため、農業部門の再編成をも考慮しなければならないのではなからうか。

(2) M家の場合

M家の集計表を示すと表-19のとおりである。

M家の林業収入は225,000円でその他に未収入金として入つたものなど加えて26万円ほどとなつている。割合当年は産出額が大きくなつているのは母屋の改修などのため臨時支出にあてられたからである。また5月に同部落のO家より林地を購入して規模拡大をめざしているのがみられる。林業労働力はすべて自家労働でまかなつているのが特色である。渡し伐りなどは一切行なわないと経営主はいつている。それに和牛2頭がいるので飼料および堆肥用として近くのスギ林地を対象に朝草刈を行なう。また下刈時の下草をもち帰ることもある。調査日の労働日記帳には朝草刈の時間が入つてこなかつたが、ほとんど毎日行なわれる。林地が対象になるのは7～9月の3ヶ月間である。年間林地より採取する量は1,200貫

にのぼる。これと同時に、落葉採取量もかなり大きくやはり1,200貫採取している。これはコンニャク畑の敷料として使用されるか堆肥用である。また、支出が極めて少ないのは特例であろうが、M家はヒノキ、スギ苗を自家養成しているし、アカマツは新植すること少なく、天然更新で間に合うほどアカマツ適地が多いことによる。ことにスギ苗は別としてヒノキ苗は容易に自家養苗が可能であるので、M家では従来からこれを行なつてきている。

表-19 M家、39年林地台帳集計表

月日	摘 要	林地台帳番号	収 入	支 出	物 財 投入量	労 働 投入量	家計仕向け数量	農業部門仕向け数量	記 事
8月	スギ ヒノキ林下刈	16. 1			本	自家 人 5		下草 400貫	堆肥用および飼料として
"	スギ林下刈	5				" 1		100	
"	ヒノキ林下刈 0.1ha	10				" 1			
"	スギ林下刈	16				" 8			
"	ヒノキ林下刈	18				" 4		200	
9月	ヒノキ スギ林下刈	17				" 11		500	
12月	スギ間伐 長材50本売る	15	20,000						
1月	アカマツ間伐 80石売る 石1,500円	8	120,000						
"	スギ間伐 20石売る 石2,000円	14	40,000						
2月	落葉採取 アカマツ間伐 30石売る 石1,500円	8	45,000					落葉 1,200貫	コンニャク畑
3月	シイタケ原木 100本採取 自給用約3石	9						薪 30束	
4月	植林 スギ7.5円	6		3,750	スギ 500 ヒノキ500	" 8			ヒノキ苗 自家生産
5月	林地購入 雑木	13		100,000					41年春新植の予定
			225,000	103,750	購入苗 スギ500 自家生産 ヒノキ 500	自家労働 38人		下草 1,200貫 落葉 1,200貫	

(3) 林地台帳と農業簿記

今まで両家の林地台帳による集計、決算を見てきたが、ここではこれらを通じて、様式そのものの問題点をさらにつつこんで検討してみたい。

中心とする問題は林地台帳のみの記帳によつて、農家経済全体の中での林業部門の位置や役割、今後の改善に対する問題意識が生じてくるかどうかという点である。林業収入にしても多種多様で、用材林生産の外、シイタケ、ナメコ、クリ栽培などもある。これらが経営組織体に組み入れられている場合などは、この林地台帳では現わし得ない。なぜなら、用材林、新炭林ないし農閑林どちらかの林地を単位として出発しているからである。だから特産関係やその他の雑収入は記帳されなく、結局、現金、現物日記帳を別に記帳していく必要がでてくる。これには補助簿として労働日記帳も必要となつてくるであろう。だから従来から農業簿記をつけているような農家なら、この林地台帳を並行して記帳すればもつとも望ましいわ

けであるが、逆に、とつきにくい農家簿記を敬遠していた農家が割合制約が少なく食欲をそそる林地台帳を記帳することからはじまり、必要に応じて現金、現物日記帳、労働日記帳を記帳していくことのほうがスムーズに農家側に受けとめられるかも知れない。

5 経営改善からみた記帳農家の分析

(1) K家の場合

K家は昔より上層農家にあつたが、父が早く亡くなつたので(53才)、戦中、戦後を通じて母の手ひとつで農家を守つた時期があつた。姉が3人いたが、1人はすでに嫁出し、K氏が13才のときであつた。それから後5年間はK氏の学校時代であり、母の手助けをするため、次女の姉は婚期を遅らせるまでの苦しい時期があつたという。その当時K氏のスギ林は搬出にも便利な所が多かつたので、強制的にほとんどが伐採せられた。戦後は農地解放のどさくさで10町歩以上を手離した。父の時代に拡大された農地はほとんど解放され、経営耕地も労力不足から手離したのが多い。こうした過程を通じて現在のK家の山林構成ができています。K家は家族構成の長期的変換が急激であつたため、林業部門がひどい犠牲になつたと考えられる。

K氏が太子農林高校を卒業してから後、農林業経営に専念することとなる。その当時から乳牛は飼っているが、2頭になつたのは最近のことである。農業部門での大きな変化は今までないが、以前より手不足のため、林業は雇用労働を中心として経営する方針ができあがつていたようである。しかし、経営主も下刈時には下刈人夫と一緒に作業をし、陣頭に立つて効率をあげることが望ましい。これには下刈時期を競合する農業生産部門の再編成が必要となろう。

当地域の林業生産は粗放的であるが、農業部門の経営改善によつて、より集約的な林業生産が可能となるのではなからうか。

(2) M家の場合

M氏は父の亡くなる(38年10月死亡)5~6年前より実質的に農家経営をしてきたが、M氏の妹、弟が多く、全部で9人いたが、現在弟1人をおいて皆独立している。M家の林業部門を見ると農業部門に高度に利用され、副次部門としての機能を果たしている。その上先代の林業への投資によつて立派な山林を有しており、(準)予備的目的から次第に(準)取引的目的に移行しつつある。投入、産出のバランスもほぼ満足されるべき関係にあり、消費経済にはたす役割も大きく、他の生産部門にも高度に利用されており、中規模ながら活発な行動様式が具現している。

M家の林地を見ると分散してまとまりがないことがあげられる。これは先代の経営主が規模拡大をはかりながら、林地へ投入していつたあらわれであり、分散していても当地には割合地味の良いところが多く現在の立派な森林構成はこれによるところが大きい。今後これを交換して1ヶ所に団地形成をはかる考えはなく、むしろ不利であろう。最近M氏がヒノキ林を仕立てる割合が多くなつてきているのは、すでに造林適地が少なくなつてきたことのあらわれと解してよい。

労働配分から林業生産はどう取扱われているだろうか。M家では林業生産はすべて自家労働でまかない、雇用労働ないし渡し伐りなどは採用していない。その根拠は請負わせる際の見積りに狂いが生じ、不合理であるという見解をとつている。現在下刈りを要する面積は2町ほどあり、これを中心とした作業が農業と競合することに大きな問題がある。そのため、下刈が適期を失して9月以降までかかることが多い。競合するのは稲作が主であり、コンニャクとはほぼ補合関係にあつて、やや不安定な位置にある。

次に林業部門から農業部門の経営仕向けにあてられる落葉、および下草についての問題を考えてみよう。落葉はコンニャク畑の敷料として反当り200貫を要し、ほぼ1反の落葉採取林が必要となる。敷料の他に堆肥肥用としても使用される。コンニャク、タバコなど土芸作物は堆肥の施用量が多い部門である。地力の維持、培養の方法として有機質肥料=堆肥の投入が有効であることはすでに認められていることであり、これは今後、技術改良によつても完全に代替されることは考えられなく、林地への依存度はますます大きくなるであろう。とくに自己所有林から採取できる上層農家では、この傾向が見られることを宇都

宮大の大崎教授が指摘している。採取された落葉は堆肥、温床、ねわら、敷料として利用される。ねわらの利用は家畜の飼育頭数の大きさに比例して多くなっている。コンニャク畑へ投与する敷料としての落葉はアカマツ落葉が混つていた方がよいといわれる。これは農用林の機能をはたしながら用材林生産をも二重に目的が達せられることであり、現にM家のアカマツ天然林は雑木との混合林が多いことは注目されてよい。現在、コンニャク作では青草の切り肥とまき肥あわせて1,200～1,300貫必要で、種玉を植える前の耕うんしたときと、植えてから金肥と混合して施す。下草刈として、林地が対象となる場合5～6年のスギ林まで採取される。これは7～9月まで続き、5～6月は畦などが対象となり、7月以降の畦草は乾燥して飼料とする。M家には和牛2頭いるが、2頭いれば完熟肥が得られやすいことと、和牛の高騰により糞畜をかねた子取用として飼育されている。うまく飼育すれば年に2頭とれて大きな現金収入源となり、今や乳牛よりも和牛の方が有利であるといわれる。毎日の朝草刈は1～1.5時間かかり、年間40～50日の労働投入と推定できる。次にコンニャク作は従来の品種備中種に代つて地玉が普及してきたのでかなり有利な作目として組織づけられている。

林業生産の目標は、雑木林は落葉採取林として0.5haほど残し、ヒノキ、スギ林半々の程度にもつていくことである。造林する順番としては、家の遠くから行ない、近くは農用林的機能を残しておきたい。家の近くには50年以上の備蓄林があり、これの取扱いはやはり次代まで残してやろうということで、Vわば紙野氏の指摘する享樂財的機能をもはたしているといえよう。

問題としては、まず下草をスギ、ヒノキ林地から搾取してきていることがあげられる。しかし、林業上からいうとマイナスでも堆肥肥源としての代替は無理であり、生産経済全体からするとむしろプラスになるだろう。

次にアカマツ天然林で、雑木と混交林をなしているのが多く、これの施業方針をどうするかである。雑木は自給用燃料、落葉採取として更新されている。天然アカマツの施業ばかりでなく、積極的にアカマツ造林地も拡張していく必要があるであろう。

6 おわりにあつて——研究を進めていく上での問題点——

以上林地台帳について考えてきたが、筆者の不勉強から独断的誤りや曲解している面が多分にあることをおそれる。また調査も農家側に不徹底な面があつて正確な資料が得られない点が多かつた。

最後に一つだけ調査期間中、念頭にあつた問題点をさらけ出して結びとしたい。

経営改善を目的とした簿記様式がいかにか立派なものが作られても、それが農民にどう受けとめられて、どれだけ記帳、集計が農民自身で行なわれ得るかということである。

調査選定した農家は最後まで協力してくれたが、半強制的なおしつけで始まつたため、おわりまでこれがマイナスとして作用したことを反省している。そこで農家側が簿記を記帳するきつかけ、意欲などはどのようにして作られたらよいものなのかという大きな問題点にさかのぼってくる。今後はまずこれを解決するような方向で調査を行なつていきたい。

おわりにこの調査に協力して下さつたK、M両氏と、全般にわたつて指導して下さつた国立林試の紙野技官および中元所長に厚くお礼申し上げます。

文 献

- 1 紙野 伸二：農家林業の経済分析 林試報告第106号別刷 昭33年
- 2 “ ”：簿記に関する資料 林業専門技術員研修会資料 林野庁研究普及課 昭35年
- 3 大槻 正男：改著 農家簿記 富民協会 昭40年
- 4 大崎六郎、阿久津洋、鷲尾良司：農用林の研究(第1報)宇都宮大農業部 演習林報告 昭38年
- 5 吉沢 四郎：農家経済と林業(1) 林試経営部 昭34年
- 6 福島県農地林務部：福島県適地適木調査報告書 昭36年